2173再構築 25

死の街・ルル

エリー

本文

　シナリオ「ララ」の中で、自由区にある「死の街」では、薬で苦しまずに死ぬ方法がある、という設定にした。

　ならば、保護区でも、管理区で世話されて生きることを拒む自由があってもよいのではないか？

　寝込んで一週間で死ななかった場合、管理区に移動されることになる。
　「保護区で死にたい」と言われたら、死なせてあげる方がよいのだろうか？
　死の街と同じ薬を与える。

　自殺すると
　　転生できない。
　　今生の課題をクリアできない。
　　来世で不幸になる。
　などと言われいてる。

　真っ暗闇を永遠にさまよい続ける、という説もある。

　それらの言葉をどこかで信じている。

　その一方で、どうせ死ぬなら、苦しい思いをせずに、眠るように息を引き取りたい、とも思う。
　死に方の選択肢があってもよいのではないか？
　そう思う自分もいる。

　寿命は神さまが決めたことだから、人が自ら死に方を選ぶのは不遜なのだろうか？

　世話をするのが嫌になって、圧力をかけられて、死にたくないのに死ぬしかない状況に追い込まれたら困るからダメなんだろうか？

　シナリオ「ララ」を書き始めた当初は、死の街は、自然に死ぬまでじっとしていられる場所、を想定していた。
　しかし、それはひどく辛いだろうと思った。

たとえば、事業に失敗して生きる希望を失った人は、体は健康だから、食事を断っても３ヶ月くらいは生きているだろう。
その間、飢えの苦しみを味わって死なせることはとても残酷ではないだろうか？

システムとして考えた場合も問題がある。
死ぬまでに３ヶ月もかけていたら、個室が満杯になって、死の街が機能しなくなる。

あるいは、介護を拒んで運び込まれた人は自力では動けないかもしれない。
そういう人は、トイレに行けないから、放置されたら糞尿まみれになってしまう。
本人もかわいそうだが、後片付けをする人も、次にその部屋を使う人も嫌だろう。

だから、飲めば苦しまずに死ねる薬を渡すことに変えた。
片付けやすい死体であることを考えたら、血が飛び散る死に方はおススメできない。
寝る前に渡して、一晩の間に亡くなって、翌朝死体を回収する、というやり方が、一番よさそうだと思った。

「薬は自分で飲むこと」を条件にしたら、こん睡状態の人は困る。
しかし、こん睡状態で治療なしに３日放置されたら、死んでしまうと思う。

そうなると、自殺ではなく、他殺ではないだろうか。
たとえば、路上で行き倒れた人を発見して、病院ではなく、死の街に放り込んだなら？
そうなると、自分の足で歩いてくることを条件にいれなければならなくなる。
自力で来れて、自分で薬を飲むことができるなら、誰でも利用できるのか？
１６歳以上の大人なら誰でも、自分で自分の死に方を決める権利があるのか。
そうすると、若さゆえの早まった考えでも、治療できるうつ病でも、死を選ばせることにならないだろうか？

助けるためには、生きる算段をしなければならない。
その算段をする人は、自由区にはいない。
全員が、自分で自分のことをしているから、他人のために生きてない。

他人のためにお金を出すことも、世話することもなく、自分のことに専念してよい自由をお金で買った結果だから、困っても助けてくれる人はいない。
個人的に人間関係を築いていなければ、異変に気づいて声をかけてくれる人もいない。
そういう「孤独」が、自由の代償。

　創作であり、現実にする、という話ではない。
　それでも迷う。

　保護区では、働ける間は何かして過ごす。
　働けなくなっても、センターまで自分で来て、自分でご飯を食べて、一人で暮らして、一人で風呂に入り、掃除や洗濯をし、一人でトイレに行けたら、保護区で今まで通り暮らせる。
　必要なことをしたら、あとは眠っていてもいい。

　もし、「もう自分で自分の面倒がみられない」という状態に陥ったら、一週間は村人が交代で世話をする。
　女は女が世話して、男は男が世話する。
　どちらでもない場合はどうするか決めてない。

　保護区では性転換手術はしない。
　自由区で手術して、保護区に戻った場合、どうするのか。

　男が女の体になって、村の女たちが女として受け入れたなら、女扱いでよいと思う。
　しかし、受け入れられなかったら、どうするのか？
　それは集まったメンバーによって決まる。
　なぜなら、保護区は、個人の感覚が大切にされる世界だから。
　原理原則はあるが、このメンバーではこうしましょう、みたいな柔軟性はある。

　どちらでもない場合、日常では、共同トイレはどっちを使うかとか、共同風呂はどちらを使うかとか、問題が起きる。
　それでも、自宅には自分専用があるから、それを使えば問題はない。
　でも、下の世話をすることになったら、どうするのか。
　女がするのか、男がするのか。

　女が女の世話をする場合でも、下の世話となると抵抗がある。
　それが実の親だろうと、下の世話というものは抵抗がある。
　それでも、世話は当番制だから、みんなが参加しなければならない。

　女が男の下の世話をするとなったらどうか。
　男が女の下の世話をするとなったらどうか。
　気になる人は気になるし、気にしない人は気にしない。

　でも、非常にデリケートな問題。

　祖母は、寝込んで一週間くらいで亡くなった。
　だから、オムツの交換はそんなにたくさんしてない。

　気持ち悪いからなのか理由は分からないが、便が出た時、オムツの中に手を入れてこねるから、爪の間にまで入ってしまって、それを洗面器で洗って、綺麗にしなければならなかった。

　わたししかいない状況で、放置することもできないからやったが、そこまでひどいのは一回だから耐えられたのだと思う。
　何度もやられたら嫌になっただろう。
　パック入りの吸うタイプのゼリーくらいしか食べられなかったから、だんだん出なくなったことも大きい。

　もし、毎日、何年も、介護が続いたら、とても耐えられないだろう。

　もともと寝込むことが多かったわたしは、一週間の介護でも葬式の時には動けなくなっていた。
　もっと長かったら、精神的にも、肉体的にも、限界を超えただろう。
　それは、健康であっても同じだと思う。

　寝込んで一週間くらいは、交代で面倒みるなら、なんとか世話できるだろう。
　しかし、それ以上となったら、小さな村で抱え込むには負担が大きすぎる。
　だから、期限を設ける。
　死にそうなわけではないなら、すぐに移送しても構わない。

　世話を受ける人は、世話をしてきた人だ。
　世話をする人は、これから自分もしてもらう人だ。
　他人同士が支え合うことで成り立つのが保護区の人間関係。
　自由区とは違う。

　食事の世話がいる。
　オムツの世話がいる。

風呂に一人で入れない。

どれか一つにあてはまった場合、管理区に移って介護生活に入る。
その資金は、自由区の寄付で賄われる。

国土を保護し、子どもを育て、引退者の世話を引き受けてきたから、介護の特権が与えられる。

それでも極力手術はしない。
苦しまない方法をとるだけ。

それは最初から分かっていることだから、何が何でも死にたくないなら、お金さえ払えば延命治療してくれる自由区で成功者になることを求めたらいい。

もし、現実に死の街で与えられるような、苦しまずに死ねる薬があったなら、介護が必要になった時、わたしは使うだろうか？

死ぬのが怖いという気持ちがある。
死に方は選びたいという気持ちもある。
分からない。

死ぬ自由はあるのか？

仏教には、断食して仏になる話がある。
辛くて、途中で逃げ出して、石を投げられる人も多かったという。
やりとげられて仏になったら人々から崇められた。

死ぬと分かっていてやるのだから、自殺と言える。
それが許されるなら、薬で死ぬことも許されるのかもしれない。宗教的には。
今の法律的には許されないらしい。ドラマでダメって言っていた。

世話してきたから、世話してもらえる。
自分は世話しないが、お金があるので、世話してもらえる。

その二つしかないと思う。

世話もしてこず、自由にすごして、介護する人を雇うお金もなければ、１６歳で独立した後は自由だから、結婚関係に縛られない。
そういう世界では、血のつながりや婚姻関係で世話を強要できない。
自分がどう生きたか。

野垂れ死にした本人はいいが、死体を放置できない周りは困るので、死んでいい場所を決めて、迅速に処理してしまう。
死体を回収して回るより、生きている間に自分の足で歩いてきてくれた方がいい。
そういう考え方は罪深いのだろうか。

倫理的にどうなんだろうと思う自分がいる。
でも自由ってそういうものでしょ、と思う自分もいる。

もしも、死に方を選ぶのが一般的な世界に生まれて、自殺に罪の意識を感じないなら、薬を飲んだだろうか？
たぶん、怖くてできないと思う。

弱って、息をするのも精一杯という状況では、このまま死ぬのではないかと思う。
しかし、息をすることしか考えられなくなっているので、怖くはない。

ところが最近、何の理由もないのに吐き気がして、本当に吐いた時、脳梗塞で倒れるのではないかと不安になった。
意識がはっきりしている時に、死ぬかもしれないとなったらすごく怖い。
自分が消える、という事実に耐えられなくなる。

それまでは、死とは神にかえること、という感覚があって安心していた。
しかし、ただただ怖くて、死にたくない。
生き残って不自由な体になるのも嫌だ。
そう思った。

だからたぶん、わたしは死の街で薬を飲むことはできないだろう。
衰弱死が理想。
眠っている間に息を引き取って、翌朝、気づかれる。
別れの挨拶はいらない。

　世話を強要する世界に戻すことは反対。
　自分で自分のことをやろうという人の世話はできても、何もかも頼る人の世話は、自分の人生を捨てることになるから賛成できない。

　だから、保護区は、自分で自分のことをする人しか入れない。
　個人として生きることが基本の世界。
　その上で、他人と関係を築くのが保護区。
　しがらみを持たないのが自由区。

　「選べる」というのが大切なところ。

　生き方を選べるなら、死ぬ方を選べてもいいのかもしれない。
　答えが出ないが、お話の中では、死に方は選べる方向でいく。

　ララの最期と関係する話なんだけど、テーマが重すぎてわたしには書けない。
　「死の街＝尊厳死」といえばそうだが、いろいろなケースを具体的に考えると難しい問題が山積みで、答えが出ない。

　最初は、子育てなどを含めて自分の体験をもとに、ララの人生を通して未来世界を書く予定だった。
　漠然と考えても前に進めないから、自分の体験を土台にすることにした。

　ロロに一年に一度送るファンレターと、それを未来で受け取るハーミットの解説で成り立つ小説という形になるはずだった。
　でも、話し合いをモチーフに、ルルの成長物語として、１６歳の一年を書く方向に変えたので、ララの最期は問われなくなった。

　ララが、ロロと一緒にいるために自由区に戻った場合、金銭労働も、家事も、十分にはできないから行く末は死の街しかない。
　ロロが弱っても、ララには世話することはできないし、料理のできないロロがララの世話をすることもできない。
　二人が一緒になることは、心中以外にない。

　ロロに財力があれば、世話をする人を雇えるかもしれない。
　そして、ロロの財産をララが受け継ぐことができるなら、介護されて自然死を迎えることができるかもしれない。
　しかし、わたしはララの最期は死の街がいいと思う。

　自由とは死を伴う厳しいものである、という立場から考えたら、心中という結末は自然だ。
　しかし、命ある限り生き続けるべき、という作者であるわたし自身の感覚から考えたら、心中という結末に抵抗がある。

　ロロは別の女性と結婚して、ララとは一緒にならない場合、ララが死の街に来る理由は、保護区の登録者の身分のまま、志願した場合に限られる。
　ララに雑用をこなす体力はないから、話し相手という役割を引き受けることになるだろう。

　死にきれなかった人の相手を続けて、最期は、死の街で衰弱して自然死を迎える。
　そういう結末なら、感覚的な抵抗はない。
　でも、ロロへの気持ちはどうなるのって思う。

　自由を認めるなら、心中という結末にする方がやっぱりいいと思う。
　でも、それは書けない。

　隣接する歓楽街で、最後の晩餐を楽しんで、死の街の門をくぐる。
　お店の人は、様子で、これから死ににいくだろうことに気づくが、何も言わない。

　死の街につくと、燃やせる服と下着が渡される。
　シャワーを浴びて、薬を受け取り、着替えて個室に入り、鍵が閉まる。

　恋人同士でも、二人で一緒の部屋に入ることはできない。
　別々の部屋で死を迎えることになる。

　薬を飲むことをためらいどちらかが生き残るかもしれない。
　どちらも薬を飲まないかもしれない。

　どっちも一晩のうちに薬を飲んだなら、医師により死亡を確認した後、火葬される。
　そして、灰は土にかえす。

　他人に振り回されず、自分の時間を大切に生きるなら、介護も看護も供養もしないし、されない。
　そんな「自由な世界」を「美しく保つ装置」として死の街がある。

　潔く、自ら死を選べないなら、犯罪を犯す以外に生き残る道はないかもしれない。
　そうなったら、敵対者として殺される運命にあるのなら、どちらにしろ成功しなかった場合の自由区での末路は厳しい。

　最期を考えたら、４０歳までに保護区で生きる道を選ぶだろうか？
　安全、安心を買うならそうだろう。

　そもそも４０歳を越えて失敗したなら、保護区に戻るという選択肢はない。
　自由区で生き残る道を探すしかない。

　暴力や暴言がひどい人は、資格なしの烙印を押されるから、保護区には入れない。
　救済対象にならない。

　世の中には、してよいことと、してはいけないことがある。
　してはいけないことをする人は、敵対者とみなして救わない。
　つまり、性質によって、社会保障が受けられるかどうかが決まってしまう。

　わたしが想定した未来世界では、全員を制度の枠にはめる対象にしていない。
　対応できる範囲しか救おうとしてない。

　積極的に殺害することまでしないが、救済の対象にはしない。
　社会保障の仕組みの中から排除してしまう。

　精神障害の有無と、暴力的指向があることは別問題。
　二つは、切り離して考えるべきだと思う。

　未来世界では、殺人などの暴力行為を行った場合、精神障害の有無に関係なく罪を問う。

「人が殺してみたかった」という理由で殺したなら、その人は救うべき人ではなく、敵対者とみなす。

では、殺人までいかなくても、窃盗などの罪を犯した場合、その人間をどうするのか？
江戸時代の刑法には、額に犬と刺青する、というものがあった。
腕に刺青を入れる、というのもある。
つまり、誰でも犯罪を犯したことを知ることができる状態にした。
当然、更生は難しくなるだろう。

未来社会の場合、端末に登録されている番号（本名）に消せない記録が残ることになる。

悪いことをする人間を区別した場合、その人間の自由をどこまで許すのかという問題が問われる。

刑務所に入れるというのは、一つの方法。
しかし、軽犯罪でずっと入れっぱなしというわけにはいかないし、維持費がかかる。
もし、元の社会に出たなら、自由区でどうやって暮らしていくのか？

国が監視し続けることは難しいから、無法地帯の責任者に管理することを求める、というのが最初のアイデアだった。
昔から、繁華街と無法地帯と死に場所はセットになっていることが多い。
しかし、悪の描写はわたしにはできない。

悪いことをしない、自制的な人の集まりである保護区の中でも、子どもは無秩序な存在。
年を取って性格が変化することもある。
無秩序の芽はなくならない。

そこで排除や抹殺の方向に進んだ場合、権力者の暴走を止められない、という問題が起きる。
では、排除しないで、抹殺もしないで、どう付き合うのか。

みんなOK的なノリで、悪いと言わない。反抗しない。すべて個性と受け入れる。
そういう態度を昔はとっていた。

でも、善悪はある。
よいことを求め、悪いことを慎む態度が求められる。

そう思うようになった。

自分の中に善悪ができたら、悪に対してどう対処するのか？
悪を悪だと批判し、指摘し続けても、相手が変わることはない。
自分がその悪に対して、どう被害を受けずにすむように行動するかが問われているのだと思う。

仮に変わるとしても、変化には時間が必要だから、「耐えて待つ」が求められる。
よくなると信じられないと厳しい。

「絶賛、悪事中」の当人に、正論をぶつけて善行を求めても意味はない。
言い争っても、殴りあいになっても、負けない強い人ならいいが、そうでない普通の人は改心するまで避難することぐらいしかできない。

改心して行動を改めた時、過去を水に流して受け入れることは、意外と難しい。
何かのきっかけで、悪い心が芽を出すかもしれない。
あるいは、改心しきれず、流されてしまうかもしれない。

いきなり信じず、ある程度の期間を静観して、やっと少し距離を縮める。
そんな慎重さが、弱い人間の特徴なんだと思う。

若いころの父は、自分の願望を通すために、むちゃくちゃな屁理屈を言ったり、感情的に怒り狂って脅したりする人だった。
若いころの母は、先回りして自分でやってしまう人だったので、それはそれで困った。やってくれたことを無駄にしてまで、自分の意見を言えないから、結局、受け入れるしかなくなる。
親に逆らうことができなかったわたしは、とても辛かった。

でも、理屈でねじ伏せたり、感情的に脅したりしたら、それは嫌っている父の態度と同じだ。
だからしない。
だけどそのままは辛いから、どうにかしたい。

攻撃することと、反対することの違いはなんなんだろうと思った。
いつなら反対していいのか知りたかった。

今の結論は、反対は攻撃であり、反対と攻撃の間に違いはない、というもの。

意見をぶつけ合えばいいと言うが、攻撃はどこまでいっても攻撃であり、それを受け止めた側の対処次第で意味が変わる。

度量の大きな人なら、間違いを指摘されても、「わたしが間違っていた。あなたが正しい」と認めて、改めることを選べる。
しかし、度量の小さな人は、間違いを指摘されるとますます意固地になる傾向がある。言わないで、自分から言い出すまで待つ方がいい。

たとえ自分から言い出したとしても、待っていましたとばかりに、「やっと気づいたの？」とか、「どれだけ自分が耐えていたか？」など、追い打ちをかけるようなことを言っても意味がない。
「今がだめなら、これからどうするのか？」という部分に注目した方がよいと思う。
自分の感情をコントロールしないとできないから、それはそれで難しいことだけど、臆病者だからこそできる芸当なのかもしれない。

信頼し合っているから、ここは嫌だ、と言える。
誰にでも本当のことを言わなくてもいい。
必要なことだけにとどめておけばいい。
嫌いだからと必要なことさえ言わなければ、今度は自分が悪の原因になってしまう。

誰にでもガンガン反対意見を述べられる強い人には、わたしはなれないし、ならなくてよいと思う。

「反対していいときがある」と思っていた若いころは、なぜ自分が反対しないのか理由を説明して質問した時、相手が考えを変えたことを「わたしの質問を無視した」と受け止めた。
「なんで、知っているのに教えないの？」と思った。いじわるされていると感じた。
でも、今になって思えば、自分が正しいかもしれないことを全く考えず、「わたしには分からない理由があるはず。それはなんだろう？」といつまでも追及する姿勢をとり続けていた、自分の幼さゆえの過ちだった。

はっきり理由が言えて、そうでなければならないことは、自分の意志が固まっているから、主張しやすい。
そんなに興味がなかったり、違いが分からない場合、それでもどちらかに決めないといけないとしたら、すごく迷う。

死の街や、悪いことをして敵対者とみなした人の生活の問題は、どうしたらいいか分からないことだ。
どうすべき、という答えが出ていないので、主張したい意見はない。
だから、物語として書けない。

現実では、やってみて「これではまずい」と分かったら修正する勇気を持つことが問われる。
結論を出すまでまっていてはくれない。

しかし、そんなことはとても怖くて出来ないから、「書けること」を趣味として書くにとどめる臆病者。

失敗して気づくことを貴いと考える人もいる。
しかし、わたしは教えてくれる人がいたならと思う。

もし「理由をつけて質問したら意見という」と教えてくれる人がいたら、「間違いを指摘するより気づくまで避難して待つ方が弱い人間には向いている」と教えてくれる人がいたら、わたしはあんなに悩まなくて済んだだろう。
そういうことを体験できる、話し合いをモチーフにしたゲームがあったらいいなと思う。
シナリオ「ルル」で物語として取り組みたいことで、ゲーム企画「民主主義」でゲームとして参加してもらいたいこと。

損得を考えたら、悪いと本人が気づくまで待って、改心したことが認められるまで静観した後、未来のことを一緒に考える態度をとるのが得策だと思う。
しかし、そんな慎重な臆病者ばかりでは、世の中は成り立たない。
損得など考えず、思ったままにガンガン意見を言う人もいないと困る。
けれども、それはとても疲れることだ。攻撃すればするほど、自分の心が削られていく。

「どうしてだろう？」「なぜだろう？」と考え続けて、自分で気づいて、自分を育てられるタイプは、指摘しても、しなくても、自然に成長していく。
すると好循環に恵まれる。

一瞬は考えるが、気づくところまで至らず、投げやりになって忘れる。そして、同じ過ちを繰り返す。
すると悪循環に陥る。

好循環にある人は、ただ信じて待つだけでいい。
では、悪循環にある人は、指摘し、指導したら変わるだろうか？
わたしは、変わらないと思う。
そういう人なのだ。

それでも、付き合わなければならない場合、「被害を受けないこと」を考えればよい。
好循環に変えようとするのは無駄な努力だと思う。
気づかない人なのだ。

本人の意志を尊重すると悪循環にはまる人を、好循環に変えるためには、「自分で考えることをやめて、考えてもらった通りにしろ」と強要する以外になくなる。
そして、誰を信じるかが問題になる。
歪んだ願望から選んだ相手なら、悪事の片棒を担がされるかもしれない。
そうなったら、自分で考えるより厄介だ。
悪事が組織的になるから。

相手を変えることはできない。
自分がどうしたいか。
困った人でも好きだと思えば付き合えばいいし、嫌だと思えば遠ざかる。
必要を満たしたら、感情的な交流までする必要はない。
義務を果たすことでよしとする。
離れられるなら、離れるのが一番よいと思う。

保護区は離れられない。
だからこそ、共同体として必要なことを役割分担して暮らしているけど、個人的なことまで立ち入ることはしない。
３０人、みんな仲良し、というわけではない。
挨拶はするが、それだけ。
孤独な人は、孤独だ。

関わりを持つ機会があるとすれば、お小遣いをもらうために手伝いをしにくる子どもとか、区長や区長補佐や相談役などの運営者との意見交換会だろうか。

世界全体を考えた場合、死や老いや病というのは扱いが難しい。
部分的に書けることだけ書いたらいいんだが、つい考えてしまう。

ララは事務限定だから、寝込んだ人の下の世話はしない。
ルルはする。
だから、もしかしたら、シナリオ「ルル」では、そういう場面を出すかもしれない。

自然と都市の間には、ここからは人間の領域と主張する強い人間がいる。
それが山男たち。
彼らは、弓矢で狩りをする。
人間は恐ろしい生き物だと言うことを動物に知らしめる役割を担っている。

そういう人は、はっきりものを言うかもね。
スズはそんな感じ。
言いにくいことをスバスバ言う。

ララは、そういうタイプではない。慎重に話す。
ボナ先生もどちらかと言えば慎重だが、言うことは言う。弱くはない。

ルルは心の中で批判するだけで言わない。
それは正論で間違いではないが、バランスを欠いている。
間違いに気づいて、バランスをとれるまでの成長物語にしたい。
若いころのわたしがモデル。